

気づきから行動へのプログラム—経験学習の力とスキル

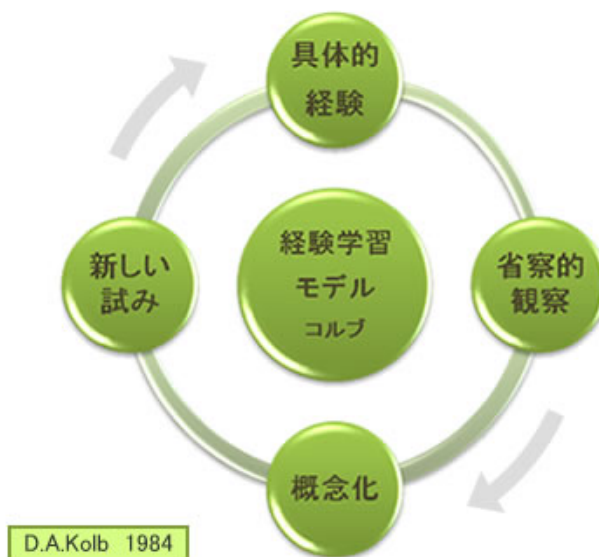
生き物は全て、経験学習的に生きています。環境からのフィードバックは、よりよく生き延びるために必要不可欠な情報であり、その情報を元に次の行動が選ばれていきます。

教育において、経験から学ぶことの大切さを指摘したのはデューイですが、経験学習のスパイラル、らせん構造的な段階としてこうぞうかしているのがコルブです。

■コルブの経験学習のサイクルモデル =経験学習の四段階

コルブ（1984）は、知識付与型の学習やトレーニングと区別して、「経験から学ぶプロセス」を経験学習サイクルとしてモデル化しています。この理論では、経験からより良くより深く学ぶには、「具体的な経験」をじっくり振り返るプロセスが大切だと言っています。また振り返ったら、それを次の経験に活かせるように「抽象的概念化」することが重要だと言っているのです。 ※抽象的概念化とは、何故そうなったか、どうすればよいか、などの考えを一般的な言葉で整理し表現することだと考えるとよいでしょう。

そしてそこで得た新しい考えや方法に基づいて行動を起こせば、今までとは異なる具体的な経験を積むことになり、経験学習はより良い形でまわっていくわけです。¹



「気づきのためのアクティビティ」は、ふりかえり、そして学ぶことができる体験を提供するものです。

¹ 経験学習の勧め <http://www.keikengakushu.jp/learn/learn.html>

■ 経験学習のコツ

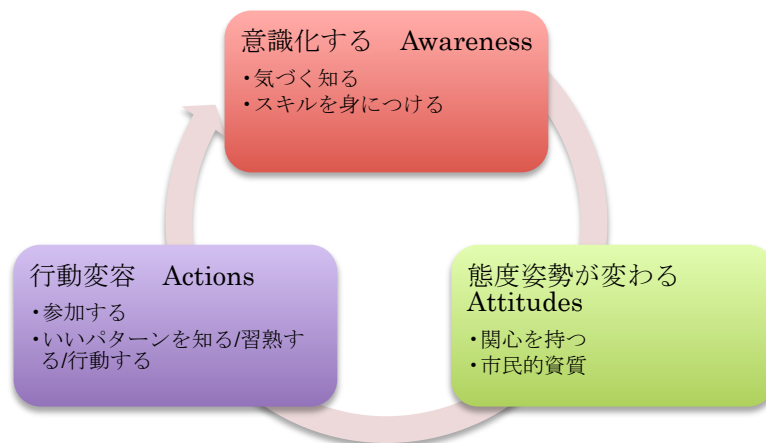
- 1) 新しい経験に関わることへの開放性や自発性（具体的な経験）
- 2) これらの新しい経験をさまざまな視座・視点から見ることのできる観察と振り返りの能力（省察的観察）
- 3) この経験から統合的な考えや概念を生み出すことのできる分析的能力（抽象的概念化）
- 4) これらの新しい考えや概念を実際の実践に使うことのできる決断や問題解決のスキル（実践的試み）

■ 経験学習を阻むものは？

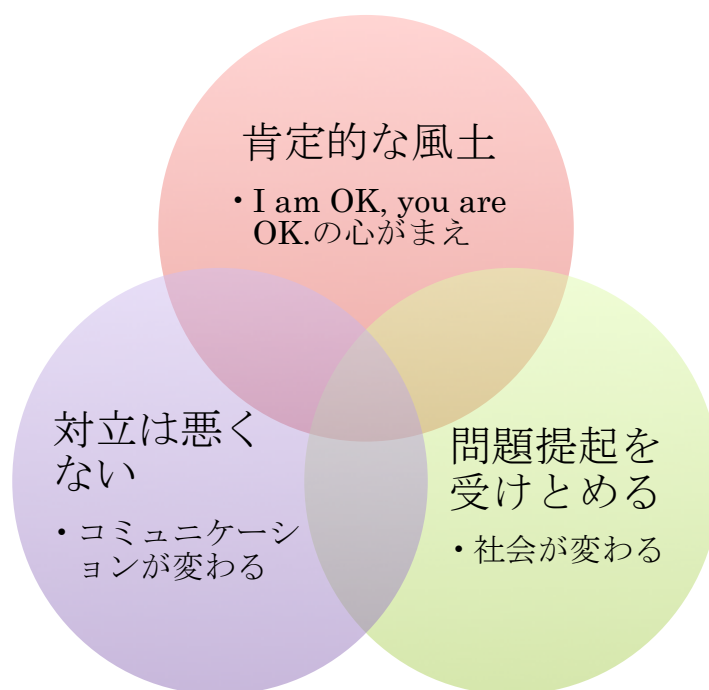
■ ファシリテーターの役割は何でしょうか？

-
-
-
-
-

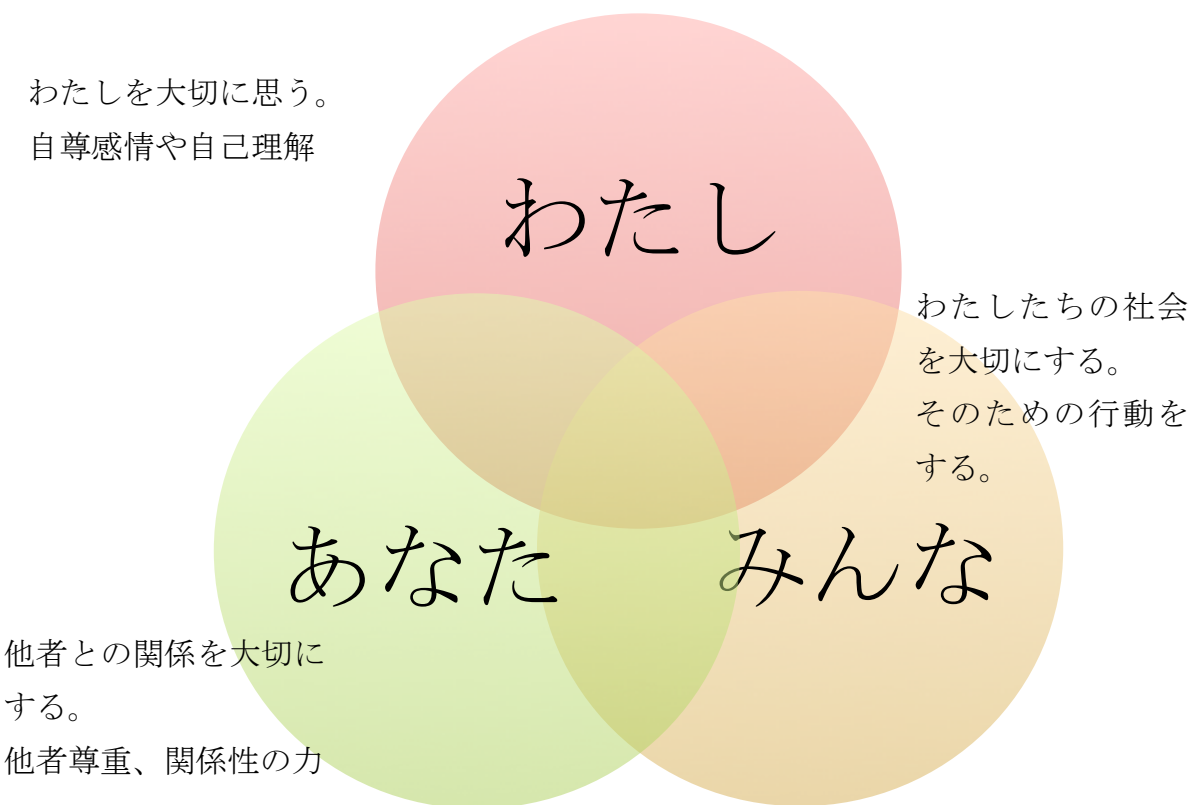
■ 人権尊重行動へ至る三段階 3As 気づきから行動へ



■ 人権尊重風土の三つの「いいパターン」



■ 参加型学習で育てる三つのスキル分野



■ あなたはどの人？ 人権に関する7つの立場 知識・態度・行動

1. 国際的な人権基準を知っている・実践している・社会的提言をしている。
2. 国際的な人権基準を知っている・実践を心がけている。
3. 国際的な人権基準を知っている・同意している。
4. 国際的な人権基準を知っている・同意していない。
5. 自分自身の人権を擁護するために行動している。協力している。
6. 排他的・攻撃的・差別的ヘイトスピーチや行動をしている。
7. 排他的・攻撃的・差別的ヘイトスピーチや行動に同調している。

■ 人類史における暴力の減少 6つのトレンド²

- 第一 都市や統治機構をもつ農耕社会への移行
- 第二 文明化のプロセス 中央集権的な統治と商業の社会基盤
- 第三 人道主義革命 理性の時代、啓蒙主義の時代
- 第四 第二次世界大戦後、先進国の大部分が互いに戦争することをやめた「長い平和」
- 第五 冷戦終結後の組織的紛争や戦闘の減少「新しい平和」
- 第六 世界人権宣言後、小規模な暴力に対する嫌悪感の増大、権利擁護運動「権利革命」

■ 人権概念の発展 3つの背景³

1. アウシュヴィッツを繰り返させない=『世界人権宣言』権利を奪う権利はない。
2. 差別撤廃・解放運動=人種差別撤廃条約(1965年)、女子差別撤廃条約(1979年)
3. 社会的弱者との共生の社会=児童権利条約(1989年)、障害者権利条約(2006年)

■ 人権を阻む？ 阻まない？ あなたはどう考える？

- 日本社会の○△□
- 日本人の価値観=間人主義、安心社会
- 群生秩序=「群れた隣人が狼になる」メカニズム

² 暴力の人類史 上下、ステューブン・ピンカー、青土社、2015

³ いっしょに考えて！ 人権、角田尚子・ERIC 国際理解教育センター、2002、p.62

□日本社会の○△□⁴

日本社会の傾向が、対立する意見を言いにくくし、「多様性の包摂」「公平 equity」「問題提起を受け止めて課題解決する」という態度と矛盾するものを含んでいる。

日本社会の特徴	何が人権を阻むのか？
○ 均質さを好む・集団主義	
△ 力の格差の感覚が大・ 上下関係が強い	
□ リスクを避ける・変化を 好まない。 前例主義	

□安心社会から信頼社会へ⁵「人は、信頼できる」から「人は信頼できない」までの5段階評価で、信頼できると答えた人を「高信頼型」人間とする。高信頼型の方が、人間観察力、「人間性」感度が高いのだ。ひるがえって「低信頼」の人たちは「関係性」感度が高い。関係性とは、その人のことを知った上で、どのような関係が自分との間に築かれているかを認知しているということである。つまり「安心」と著者は名付ける。地縁血縁の社会は、後者の「安心社会」なのだ。その基盤が崩れつつあるいま、わたしたちはいかに「信頼」の社会を築けるかが、鍵なのだという。

□「群生秩序」⁶。群れの付和雷同の中で、全能を配分することによって是非を分つ、情動の共振から生じる秩序のこと。課題は、「構造的な力関係によって人格的な隷属を引き起こしやすい社会領域(学校、職場、家族、地域社会、宗教団体、軍隊など)に対して、個人の自由と尊厳を確保しやすくする。」

⁴ いっしょに考えて!人権、角田尚子・ERIC 国際理解教育センター、2002、p.73

⁵安心社会から信頼社会へ 日本型システムの行方、山岸俊男、中公新書、1999

⁶ いじめの構造 なぜ人が怪物になるのか、内藤朝雄、講談社現代新書、2009